

ペーパーレス妨げる 日本の商慣習とは

ジャーナリスト
海部隆太郎



先日、大学教授（科学者）を取材する機会があった。貴重な話を聞いた後の雑談で「鶏が先か卵が先か」の考え方を面白おかしく語ってくれた。要約すると生物の進化を考えれば、もちろん鶏が先になるのだが、それで終わってしまえば話はずまらない。どちらが先なのか結論の出ない「命題」のように捉えるからこそ、いまだに「鶏と卵」議論が廃れずに生き残っているのだという。

「鶏と卵」は子供の頃、むきになって同級生と議論したことがあった。さらに、その頃はやった漫才で「地下鉄はどうやって車両を地下に入れたのでしょうかね」「渋滞の先頭はどうなっているのでしょうか」などを連想的に思い出してしまった。もちろん、今は答えをすぐに見いだせるが、当時は言葉に詰まり、本当にどうなんだろうと真剣に考えていたと思う。

似たような話は、たくさんある。だが、笑える話をまとめただけでは、読者の方から響き（ひんしゆく）を買うのは間違いないはず。本題に移らなければいけないのだろう。だが、ここで指摘したかったのは、答えが分かっているが、少しだけつまずいてしまうような話の面白さと、疑問に思うことの大切さを感じるべきではないかということだ。

無くせるか 日本の文化「押印」

さて、コロナ禍で働き方が大きく変わりつつある。以前はテレワークと称した在宅勤務は、リモートワークに置き換えられ、混雑した通勤電車を避け、概ね快適な仕事環境が得られるようになった。運動不足による皮下脂肪の増

加など副作用はあるが、会社に行くことがサラリーマンの仕事という概念を崩すきっかけになったと思う。コロナウイルスの功罪を語っているのではない。

その一方で、「請求書の発行や決済押印のためだけに会社しなければならぬ」という声もよく聞く。それならばパソコン上で押印ができればいいと思うが、現状はそれをプリントするのがオチ。デジタル化の流れの中でアナログが捨てきれない紙書類をかたくなに守るのが日本の商慣習だ。

日本を代表する、あるIT企業の担当者は「紙書類が果たしてきた原本性

を絶対視する文化は根強い」と話す。紙による原本性は、耐改ざん性があるからだ。ではどうするか。書類を電子化して原本性を保証する仕組みがあればいい。技術的には存在するが、法整備への議論がこれから。だが、デジタル文書が本物で、プリントしたら紙はコピーとなる世の中が必ずやってくることを確信する。欧米だけでなくアセアン諸国の取り組みをみればわかる。

文字ができ紙が発明されてから数千年も続く紙文化を無くせるか、商慣習を変えることへの抵抗感を捨て去ることができるか。だが、世の中はデジタル化の流れでこれに異論を唱える企業は皆無だろう。そこにはペーパーレス化も謳われているのだが、相変わらず紙書類を重視する文化は無くなっていない。「IT化で資料作成が容易になり、プリントする紙が増えた」という話もある。

冒頭の漫才風に言えば「デジタル化が進展しているのに、どうして紙が減らないのですかねえ」と問い直したい。

【筆者紹介】

海部隆太郎（かいべりゅうたろう）
法政大学卒。日本工業新聞社、IT企業を経て独立。中小企業を中心に企業が抱える幅広い課題を取材・執筆活動を展開する。

